学部学生の研究実習の一環として，再び長野県上村へ出かけ，昨年面接したケースを一部含めつつ40余ケースの面接資料を採集した。この再訪は，村内の一部落に対する自動車開通の影響をみるためのものであったが，昨年の面接と合せて，われわれの資料の信頼性をチェックすることにもなる。

さらに，この研究については，科学研究補助金総合研究を申請していたが，幸いに若干の研究費が得られ，その研究費の範囲内での研究計画を樹てた。北大，三宅和夫氏，山形県教育研究所，三沢清男氏，広島大，小川一夫氏，熊本大，鈴木康平氏を共同研究者として，札幌市，山形市，名古屋市，広島市，熊本市およびそれぞれの周辺に離村してきた「いわゆる過疎地」からの人々に対する面接調査を実施し，既に手にしている各現地での面接結果と総合しようとするものである。われわれとしては，長野県上村からの離村者40名，岐阜県坂内村からの離村者40名を面接する計画である。

なお，既に実施した長野県，山形県，愛知県，島根県での面接資料等は，今後の立論，立証のための基礎であるので，これを整え，「研究資料」1～4としてタイプ印刷した。引続き，本年の面接についてもこれを行なっていく予定で仕事を進めている。

また，昨年の調査のうち，中学生に実施した質問紙調査の整理結果を日本教育心理学会第13回総会（於神戸大学）で発表することになったので，研究全体の構想について冒頭に報告した。

2. 「質問紙型式のパーソナリティー・テストに関する方法論的吟味」については，その第二報告が「教育心理学研究」19巻2号に掲載された。引続き，織田揮準・鈴木真雄両君の協力を得て，第三報告のための資料採集を進めている。これは，66個の項目について，該当・非該当などの判断を求めると共に，その判断の際に手掛りとして想起した事項，および呈示した項目の反対の意味にあたる内容をチェックしてもらうもので，66ページにわたる大きな調査である。大学生を被検者とし，約1,600名のデータが集まる予定であり，既に集まったものについては集計中である。

なお，この結果の一部を検討し討論した結果，この研究は，あと第四，第五報告までは少なくとも必要であるということになったので，まだ当分は継続するわけである。

3. 「大学入学者選抜方法研究委員会」の仕事は，当然ながら継続中であり，本年10月に，昭和45年度分と昭和46年度分の報告書を出した。このうち，46年度分では，「入学試験の学力検査で同程度の成績を収めている者について，出身高校の如何により，入学後の成績（教養部および学部）にかなり差がある」こと，「その差は，高校在学中の成績が同一段階であった者を，高校別に比較した場合」よりも大きな差であることが判明した点が，興味ある点である。

4. 本年4月，京都大学の高瀬常男氏との共同編著として，教育学叢書第11巻「教育指導」が刊行された。教育指導，すなわちガイダンスを，その荷い手である教師の在り方，内的教師論として述べようというわれわれの意図が，十分実現したかどうかは問題であるが，一つの行き方を示しえたと思っている。

5. 過疎研究の学会への発表とは別に，同じ日本教育心理学会総会において，シムポジアム「児童・生徒理解のための実践的研究法」をオーガナイズし，司会した。広く教育研究における臨床学的研究の必要性，教育心理学における実践的研究の必要性は，今日まで折に触れて述べてきたが，その研究方法を討論する以前に，まだ，実践的または臨床的研究の必要性について，十分な納得がないように思われた。教育心理学者は，いわば「真空の中の人間行動」を研究すればよいのであるとの発言さえあった。

学会発表というには遠い感じがするが，8月29日，日本医学教育学会総会に招かれて，「教育評価について」の特別講演を行なった。医学教育が種々論議されている折柄でもあろうが，医学者がこの問題について，かなり熱心に考え，諸外国でのいわゆる評価法などについても調査研究しているのに感服させられた。

（1941年11月22日）

1971年度の研究活動の概要

丸　井　文　男

1971年5月に，永年の要望であった，特殊実験棟（臨床棟）が新たに文学部との中間に完成し，臨床グループは，そちらに移転した。万点の施設とまではいえないが，従来よりもはるかに仕事がしやすくなった。ことに play room が2個ととのい，又，行動分析室が整備されたので，治療の分野では，ことに好条件になった。

これにともない，大学院学生諸君の研究室も2部屋移転し，routine の活動は，大変便利であり，ケースも漸

次増加して，いささか担当しきれない現況である。

又，毎週金曜日は，夕刻から9時，10時まで，Case Conference,（New Case, Joint Conference, Final Conference）がつづいている。

以下，この1年間の研究過程の概要を述べる。

1．所謂“自閉症”児の治療方法に関する研究——1969年よりの継続で，自閉症の治療がすすむにつれて，成果も上がり，状態像が変化してくるので，当初の集合的個人遊戯療法（collective individual play therapy）の外に，集団療法や個人療法も積極的に拡大し検討している。

自閉症児の治療が臨床心理学的分野において，ことに意欲的に治療が試みられ，最近は，各所で成果を上げているが，ここのグループ（主として大学院学生）の治療は，他に決してひけをとらない秀れたレベルに近づきつつあると考えている。

2．自閉症児の治療過程の分析——今回の紀要に論文として掲載したが，昨年の研究論文は8事例についての記述的方法で，主として集合的個人遊戯療法の検討を行なったが，今回は，そのうちの，それぞれ可成り自閉症の型を代表するような3例について，VTRの撮影をしてきた資料を手がかりに，治療の各時期にわけて，再生し，分析カテゴリーにもとづいて，8名（主として，大学院学生）のグループで分析を丹念に実施した。詳細は，今回の紀要のなかに掲載されている。

3．大学生の適応異常に関する研究——過去10年近い間，いろいろな角度から検討してきたものであるが，昨年にひきつづき，広島大学，京都大学，九州大学との共同研究で，留年，Screenig Testによる早期発見方法，などを継続している。

一方，文部省の厚生補導特別企画研究として，本学学生相談室専任の土川隆史助手とともに，大学入学直前の高校3年，又は，浪人時代から，本学に入学した後の適応状態について，追跡研究をはじめている。

1971年1月に，第1回の資料（質問紙調査）を得た約500名のうち，4月に名古屋大学へ入学したものは，約140名で，これは，愛知県，三重県，岐阜県出身者が大部分である。一方，これに対比する者として，全国各地から入学したもののうち，1名しか合格しなかった高校出身者約120名を選出し，この両方を，質問紙，面接などによって継続して追跡することにしている。

4．発作的意識障害を訴え，反社会的事件を惹起した1青年の精神病理学的考察——昨年の本欄で一寸触れたが，1970年8月に某近県で発生した某警察官傷害事件の19才の少年の事例である。

今月までにほぼ1年間，某病院に入院，精神鑑定的意図の外に，治療的社会復帰を目的として追跡してきた。いずれ詳細は公表したいと思っているが，最近までに，可成りの部分精神病理学的立場からの資料を得ることが出来た。その概要に触れると，幼少児より，SF小説をこのんでよむ一方，空想的一人あそびを特にこのみ，中学校に入学したころから，顕著なDay Dreamの体質がましてきている。そして，中学2年ごろからDay Dreamから，意識の自己集中によって，自己催眠状態に入ることを体験し，次第に，その傾向に入ることの経験を増したようである。今回の警察官傷害事件も，この自己催眠状態のもとで発生したものとみとめられる。

このようなケースは，極めて稀な事例と思われるが，今後なお社会復帰への機会を得させるように，治療的な関係を継続する予定である。（1971年11月22日）

一年間の研究経過報告と今後の課題

植　村　勝　彦

1．昨年の本欄に報告した「時間的展望」研究の継続として，そのひとつのまとめを「青年の時間的展望と職業に対する態度」と題して「青少年問題研究」（大阪府青少年問題研究会）に投稿した（印刷中）。この研究に関しては，これまでの内外の成果の論評も昨年来の宿題であったが，文献の収集と分類整理の段階に留まり，レビューするには至らなかった。今後の課題として継続を期したい。

2．昨年来の共同研究である「過疎地域」問題は今年度も継続して行なわれ，次の如き成果及び研究を継続中である。

イ　昨年調査に出向いた島根県頓原町，愛知県富山村，長野県上村，山形県大蔵村の4町村における面接調査結果は夫々テープを翻文し，名古屋大学教育学部教育心理学科研究資料としてNo.1からNo.4まで公刊した。また，今年度出向いた熊本県水上村，長野県上村（2度目）の面接結果についても，今年度中に研究資料として公刊するべく目下翻文整理段階にある。

ロ　昨年出向いた上記4地域において，同時に行なった中学生に対する質問紙調査の結果については，1971年度日本教育心理学会総会において「いわゆる過疎地域の問題」と題して，続有恒，永田忠夫と共に発表し，私の